

要 旨 紹 介

1 家族以外の者からの加害行為の状況

家族以外の者からの恐喝，身体的暴力①（軽度），②（重度），性的暴力①（接触）及び②（性交）について，それぞれの被害の状況や被害を受けた時に少年がとった行動等を見た。なお，分析に際しては，家族以外の者から加害行為を受けた経験のある者を，「一般単回群」（一度だけ被害を受けたとする者及び被害回数について「覚えていない」とする者）と「一般反復群」（繰り返し被害を受けたとする者）に分け，群間の対比を含め，被害経験の特徴を把握することに努めた。

その結果の概要は以下のとおりである。

- (1) 恐喝，身体的暴力①（軽度）及び②（重度）（以下，「身体的暴力等」という。）並びに2種類の性的暴力のいずれか一つでも受けた経験のある者は，全体の約90％である。また，これら五つの加害行為について少なくとも一つ以上の反復被害経験のある者は全体の約80％で，男女に有意差は見られない。
- (2) 被害類型を見ると，男子では「身体的暴力等の反復被害経験があり，性的暴力の被害経験のない者」が約60％，女子では「身体的暴力等及び性的暴力双方の反復被害経験がある者」が約40％と，それぞれ最も多くなっている。
- (3) 身体的暴力等の被害状況については，次のとおりである。
 - ① 身体的暴力等の三つの加害行為のうちいずれか一つでも受けた経験のある者は，男子で約90％，女子で約80％を占め，それら加害行為のうち一つ以上について反復被害経験のある者は，男女とも約70％である。
 - ② 最も多くの者が身体的暴力等を受けた時期は，一般単回群の場合，男女とも，恐喝及び身体的暴力①が中学生の時で，②が中学卒業後であるが，一般反復群の場合，女子の身体的暴力②が中学卒業後であることを除き，いずれも中学生の時である。
 - ③ 身体的暴力等の最もひどい加害者について最も多いものは，一般単回群では，恐喝の場合，男女とも全く知らない人，身体的暴力①及び②の場合，男子が先輩で女子が友達・恋人である。一般反復群では，恐喝の場合，男女とも先輩，身体的暴力①及び②の場合，男子が先輩で女子が友達・恋人である。
- (4) 身体的暴力等を受けた時の行動等については，次のとおりである。
 - ① 身体的暴力等を受けた経験を誰かに言ったことがあるとする者は，男子で60から70％，女子で70から90％である。群別に見ると，男子で，いずれの加害行為についても，「言ったことがある」とする者が一般反復群で有意に多い。また，その相手は，男女とも，いずれの加害行為についても，友達・恋人・先輩が最も多い。
 - ② 身体的暴力等を受けた経験を言わなかった理由として，男子では，いずれの加害行為においても，一般単回群は「たいした被害ではなかった」が，一般反復群は「言ってもむだだと思った」，「言うとかえってひどい目にあうと思った」が有意に多くなっている。
 - ③ 身体的暴力等の被害を受けたときの行動について，男女とも，いずれの加害行為についても，どちらの群も「じっとがまんした」とする者が最も多い。これに次いで，男子では，いずれの加害行為も，一般単回群では「気にしたり，考えたりしないようにした」，「自分も他の人に同じようなことをした」，「相手にやり返した／仕返しをした」が，一般反復群では「自分も他の人に同じようなことをした」，「相手にやり返した／仕返しをした」が高い比率となっている。また，女子でも，一

般単回群ではいずれの加害行為も、「気にしたり、考えたりしないようにした」が高くなっている。一般反復群では「やめるよう言った／言ってもらった」(恐喝)、「酒を飲んだ／薬物を使用した」(恐喝, ②), 「相手にやり返した／仕返しをした」(①), 「やめるよう言った／言ってもらった」(①), 「相手にやり返した／仕返しをした」(②) がそれぞれ高くなっている。

- ④ 身体的暴力等を受けた経験のある者のうち、その加害行為が「終わった」とする者は、女子の恐喝の一般反復群で約60%とやや低くなっている他は、すべて70から80%台である。終了した理由として、男女ともいずれの加害行為も、「相手に会わなくなった」とする者の比率が最も高い。
 - ⑤ 身体的暴力等の被害経験と非行との関連についての認識を尋ねると、被害経験が非行の原因であると「思う」とする者は、女子の恐喝で約20% (一般単回群) ないし約30% (一般反復群) であるほかは、一般単回群が10%台、一般反復群が20%台である。また、いずれの加害行為についても、男子で群間に有意差が見られ、「思わない」は一般単回群で、「思う」及び「分からない」は一般反復群で、それぞれ有意に多い。
- (5) 性的暴力の被害状況は、次のとおりである。
- ① 性的暴力①及び②のどちらか一つでもを受けた経験のある者は、男子で約20%, 女子で約80%であり、それら加害行為のうち一つ以上について反復被害経験のある者は、男子で約10%, 女子で約60%である。
 - ② 最も多くの者が性的暴力を受けた時期は、性的暴力①で、男子は中学卒業後、女子は中学生の時 (一般単回群) あるいは中学生の時及び中学卒業後 (一般反復群) である。②では、男女とも中学卒業後である。
 - ③ 性的暴力の最もひどい加害者について最も多いのは、男子は、①, ②とも、一般単回群が友達等、一般反復群が友達等及び先輩であり、女子は②の一般単回群が先輩である以外、すべて全く知らない人である。
- (6) 性的暴力を受けた時の行動等については、次のとおりである。
- ① 性的暴力を受けた経験を誰かに言ったことがあるかどうかについては、①, ②とも、男子ではどちらの群も「言ったことはない」が、女子は、「言ったことがある」とする者の比率が高い。また、その相手は、①, ②ともまた男女とも、友達・恋人・先輩が最も多い。
 - ② 性的暴力を受けた経験を言わなかった理由として、①の男子の一般単回群を除き、いずれの場合も「言うのがはずかしかった」とする比率が最も高い。
 - ③ 性的暴力の被害を受けたときの行動について、男子は、①, ②ともどちらの群も、「やめるよう言った／言ってもらった」、「じっとがまんした」、「気にしたり、考えたりしないようにした」とする者の比率が、他の項目に比べて高い。女子は、①の一般単回群の場合、男子と同様である。①の一般反復群と②のどちらの群も、先の三つに加えて、「何もしたくなくなった」、「酒を飲んだ／薬物を使用した」が高いほか、②の一般反復群では、「自殺しようとした」、「自分の体を傷つけた」も高い。
 - ④ 性的暴力を受けた経験のある者のうち、その加害行為が「終わった」とする者は、①, ②とも、男子がどちらの群でも70%台、女子が一般単回群で80%台、一般反復群で60%台である。終了した理由として、①, ②ともまた男女とも、「相手に会わなくなった」が最も高い。
 - ⑤ 性的暴力の被害経験と非行との関連についての認識を尋ねると、男子では①, ②とも、「思わない」とする者が一般単回群で90%台、一般反復群で80%台と最も高い比率を占めている。女子でも同様に、「思わない」とする者が最も高い比率を占めているが、「思う」とする者も、10ないし20%台を占めている。

2 家族以外の者からの被害及び家族からの被害から見た少年院在院者の特徴

家族以外の者からの被害の有無と家族からの被害の有無の関連について分析するとともに、家族以外の者からの被害の有無と家族からの被害の有無を組み合わせることができる4群の特徴を検討した。その上で、少年院在院者の被害経験全体の中での被虐待経験の位置付けを試みた。

その結果の概要は以下のとおりである。

- ① 家族以外の者からの被害の有無と家族からの被害の有無に、一方を経験している者は、他方を経験している場合が有意に多く、一方を経験していない者は、他方も経験していない場合が有意に多いという関連が認められた。身体的暴力と性的暴力の間にも、同様の関連が認められた。このことから推測されるように、少年院在院者は、複数の種類の被害を受ける傾向がある。特に女子は、性的暴力の被害を含んだ被害を受けている者が多い。
- ② 家族以外の者からの被害を受け始めたのは、初発非行の時期と同じである者が最も多く、家族からの被害を受け始めたのは、初発非行の時期より前である者が最も多かった。また、家族からの被害を、家族以外の者からの被害より先に受けている者が多い。
- ③ 家族以外の者からの被害の有無及び家族からの被害の有無と非行性との関連を、長期処遇・短期処遇の区分及び入院回数という指標で検討した結果、男子において、家族からの被害の有無と非行性との関連が認められた。家族からの被害経験がある者は、ない者と比べ、非行性が進んでいる。
- ④ 家族以外の者からの被害の有無及び家族からの被害の有無と性格特性との関連を、法務省式人格目録の得点を指標として検討した結果、家族からの被害がある群は、ない群よりも、神経質で被害感が強く、自信がなくて抑うつ的である一方、怒りっぽかったり、支配欲求が強く自己顕示的な性格特性を示す傾向が認められたが、家族以外の者からの被害がある群は、ない群よりも、明るく社交的で、他人から嫌われまいとして自分を良く見せようとする性格特性を示す傾向が認められた。また、家族以外の者からの被害と家族からの被害の有無を組み合わせで作った4群で比較した場合、最も多く差が見られたのは、両方の被害経験がある群と家族以外の者からの被害のみ経験している群との間であり、両方の被害経験がある群は、家族以外の者からの被害のみ経験している群よりも、神経質で被害感が強く、抑うつ的である一方、怒りっぽかったり、支配欲求が強く自己顕示的な性格特性を示す傾向が認められた。このことにより、家族以外の者からの被害と家族からの被害とでは、性格特性との関連の仕方が異なることがうかがわれた。
- ⑤ ④の結果の背景を探るために、上記④の4群と、対象者の属性にかかわる多くの変数との関連について分析を行い、各群で有意に多かった変数または少なかった変数を特徴として列挙した。その結果を端的にまとめると以下のようになった。
 - ・両方の被害経験がない者は、家族の問題は目立たないが、知的能力の低さや非社会性など、本人の資質の問題が大きい。
 - ・家族からの被害のみ経験している者は、家族の問題も本人の問題も大きいですが、中学校を卒業するまでは非行が目立たなかった。
 - ・家族以外の者からの被害のみ経験している者は、家庭の問題は目立たず、思春期以降に問題を起こし始めたが、非行性の程度は、少年院在院者の中では比較的軽い。
 - ・両方の被害経験がある者は、親の態度に拒否的傾向がうかがえ、問題行動が小学生時など早い時期に見られ始めていて非行が進んでいる。

以上から、両方の被害経験がある群と家族以外の者からの被害のみ経験している群とは、前者で親に拒否的な態度がうかがわれる一方、後者ではそうした傾向はなかったり、前者では少年院に2度目

の入院の者が多かったり小学生以前に非行が見られ始める者が多かったりする一方、後者では2度目の入院が少なく初回入院の者が多かったり、小学生以前の早期の非行が少なかったりと非行にかかわる問題の大きさが対照的であり、④の結果はこの分析を反映していることが分かった。

- ⑥ 家族からの被害経験全体と被虐待経験との関係を見ると、家族からの被害を受けた経験がある者の約70%が被虐待経験者である。この被虐待経験者のうち95%以上が、家族以外の者からの被害も受けている。被虐待経験者は、虐待以外の家族からの被害を受けた者に比べ、家族からの被害を家族以外の者からの被害や初発非行より先に受け始めている場合が多い。
- ⑦ 非行にかかわる問題が大きいという結果が出た、両方の被害を受けている者の中でも、家族からの被害が虐待であった者は家族からの被害が虐待でなかった者よりも、性格形成や問題行動の開始に虐待の影響がうかがわれる。